



「富の主(あるじ)は天下の人々なり」 石田梅岩

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパート8回目のテーマは、定本『ゼミナール経営学入門』第7章の「資本構造のマネジメント」。舞台は一転、前回の古代「ローマ」から我が国「江戸」中期へ。そして主役は、「石門心学」の祖・石田梅岩。祖が京の庶民に説いた生活道徳は、弟子たちによってその後各地各層に広がり、さまざまな人々の精神的な柱となって今日に至っています。

その1: ことわざの背景

徳川綱吉の治世、丹波の国に生まれ、吉宗の時代に京で活躍した石田梅岩。乱世が終わり、平和な時代の訪れに伴って発達したのは「商業」と「金融業」。それは以前とは桁違いの「富」とともに、現代に通じるさまざまな「格差」を生み出しました。

江戸初期、武士出身の鈴木正三によって、すでに士農工商別の「職業倫理」は説かれていましたが、当時はそんな時代にふさわしく、庶民をも納得させる新たな「思想」が求められていたのです。

そこに現れたのが、農家出身ながら、長年の奉公によって「商業」にも深く通じた梅岩。その仕事と学問の両立という血の滲むような努力が、我が国固有の信仰に仏教と儒教の教えを融合させ、時代を越える「実学」の基本思想を生み出しました。

その2: ことわざの真意

表記は「石門心学」の集大成、『都鄙問答』の「商人の道を問うの段」にある格言。そこで梅岩は、朱子学由来の「賤商思想」に覆われている社会に向かい、商人にとって「武士の俸禄」に等しい、「利益」の正当性を正々堂々主張しました。そしてその「勤勉」「正直」「儉約」の積み重ねである「富」が、いざというときに備える内部留保であるばかりでなく、適切な外部活用によって他人を助ける元手であることを説いたのです。

ここで確認しておかなければならないのは、その主張が「循環型社会」を前提にしたものであったこと。それは我が民族が「成長」という亡霊に囚われ、その循環からはみ出る「余剰」の多寡を競い始める「文明開化」より、百年以上も前のことでした。

またその後を振り返るとき、私たちは祖の「お金は天下(公)のものである」という信念が、SDGsばかりでなく、ESG(環境/社会/ガバナンス)投資の思想的な先駆けであったことを知るのです。

『三々な経営』

0-25 同族企業生き残りの条件

Z-05 「事業リスク」の領域

『四字熟語』で考える経営戦略

Y-05 「内部環境」を考える・その2

YF-9 カネ その1「銭財能力」「悪銭苦闘」

その3: 定本の確認と発展

さて定本は、まず資本市場と企業の多様な関係を眺め、そこにおける株式会社の特徴や利点、さらに問題点を挙げています。次にその直接、間接および内部金融に論を進め、我が国における資金調達のある方や資金提供者の制御についてさまざまに考察しています。

また今回の金言絡みでいえば、そこには「富の主」と「天下」を巡る、歴史的かつ社会的思考が欠かせません。その中で「石門心学」が果たした役割は極めて大きく、その後の二宮尊徳などを經由して、彼の渋沢栄一翁にも引き継がれました。さらに松下幸之助を筆頭に、近現代の多くの経営者に大きな影響を与えたことを見逃す訳にはいきません。

そしてその精神を受け継ごうとするミドル有志は、社会と時代の変化に合わせ、その「富」の適性度と「天下」の範囲を設定し直さなければなりません。特にいま「富」に関わる「市場」の多くは、膨張を制御できず、すでに「天上」に達しています。幾多の歴史が教えるのは、神のみが知るその領域に立ち入った「市場」にくだる、バブル崩壊という天罰。そしてその後の「天下」への縮小回帰です。

「金(カネ)は天下の回り物」私たちがよく知る金言は、祖の格言が理解されづらいことを知った、弟子たちによって用意されたものでしょうか？

2022年3月28日 実空